

## 日常異変 コロナの私 (10)

北海道で感染者が減らないのはなぜか？



札幌市民の憩いの場、藻岩山山頂から望んだ市街地（左）と藻岩山スキー場のゲレンデ

6月に入って北の大地は、一年で最も気持ちのいい季節を迎えた。197万人強の人口を抱える札幌市でも最高気温が25度を超え、汗ばむ日が多くなってきている。ただ、湿度は低くからっとしていて、過ごしやすい。

とっていると、薄いコートが欲しくなるくらい寒い日もある。昨年9月から、「サッチョン」生活を始めたが、札幌は南から、北から風がよく吹き抜け、よって雲の流れも速く、天気がとても変わりやすい街であることに気づかされる。冬季には、1日のうちで吹雪と青空がめまぐるしく変わる日もけっこうある。地形的に風の通り道なのだろう。



北海道大学のポプラ並木と、道端に積もるポプラの綿毛。



北大農場で草をはむヒツジ

晴れた日、すがすがしい薫風に乗って気持ちよく漂う綿毛をよく見かける。この時期の風物詩・ポプラの綿毛の浮遊なのだそう。札幌駅前に漂う、綿毛は広大なキャンパスを誇る北海道大学のポプラ並木などから、飛来してくるが、その数は尋常ではない。タンポポの綿毛しか思いつかない北関東生まれの身にとって、この中をランニングすると、吸い込んで肺が詰まってしまうのではないかと、不安になる。ただ、今年は外出時にマスクが欠かせないので、その心配はいらない。気持ちよい季節と裏腹に、気分が晴れない日々を送っている。新型コロナウイルス感染症の拡大が暗い影を落としているからだ。

北海道では、今でも毎日数人～10人ほどの感染者が報告される。4月6日に一度、感染者がゼロになって以来、感染者が途切れた日はない。4月1日時点で177人の感染者が報告され、ほぼ同数の178人だった愛知県が、その後(6月18日現在)517人で拡大を抑えたのに対し、北海道は1167人と着実に数を増やし、

全国4位に位置する。

なぜ北海道は、感染者が減らないのか？ 特に大都市、札幌とその周辺地区に感染者は集中している。この状況の背景には何があるのか。その要因を考えてみた。



今年2月に開かれたさっぽろ雪まつりの大雪像。来年の雪まつりでは、大雪像づくりは中止が決まった。

### さっぽろ雪まつりで感染者流入

一つ目に挙げられるのは、準備不足での大量の感染者流入である。その引き金は、2月4～11日まで札幌市大通公園で開かれた「さっぽろ雪まつり」だ。

1月の記録的な少雪で、開催すら危ぶまれたが、2月3日以降、大量の雪が降り、道内外を含めた日本各地、アジア、欧州各国からの観光客202万人が訪れた。過去最高だった前年の273万人から70万人も減少した。

気づかぬうちに「密」が形成され、その中に感染者が含まれていた。実際、新型コロナウイルスの潜伏期間は2週間ほどとされるが、雪まつりから2週間ほど経過した2月21日から道内で感染者が急増。以降、北海道の感染者数は、3月下旬まで全国のトップで推移することになる。鈴木直道知事は、厚生労働省クラスター取材班の「8割おじさん」こと、西浦博北大教授のアドバイスを受けながら、全国に先駆けて、2月26日に道内小中高の一斉休校、28日には法律に基づかない、道独自の「緊急事態宣言」の発令に踏み切り、外出自粛を訴えた。

この判断に道民は不意を突かれたのだろう。結果的には正しい施策で、国もこれに倣った。しかし、密閉された北海道独特の建物の環境、繁華街と駅を結ぶ地下歩行空間などの「3密」になりやすい都市構造も災いし、札幌市内や北見市内でクラスターも発生してしまった。しかし、知事の素早い呼びかけにきちんと呼応し、この「第一波」は収束し、緊急事態宣言は、3週間弱で解除された。

「第一波」抑圧の成功は、道民の努力のたまものであるが、その成功体験が油

断となり、逆により強大な“第二波”を招いてしまったのだろう。その始まりは、宣言が解除された翌日3月20日からの3連休だ。晴れ上がった日もあり、全国唯一、外出自粛を求められた市民らが、解放感に浸り、どっと街に繰り出すのは自然の流れだ。マスクをせずに歩く人を多く見かけた。市中感染が広がったのである。

## 医療体制の不備、司令塔不在

雪まつりから、第二波が押し寄せる3月下旬までの1か月半。本来、準備しなくてはいけないものができなかった。それが、第二波を大きくしてしまった。第二の要因である、司令塔不在など医療体制整備の出遅れだ。

この時期は、東京などの首都圏にも感染者が急増。そうした国内各地から北海道への感染者の移動が活発になった。時は、人事異動、新入学シーズン。この時期の北海道で蔓延したウイルスのタイプが、中国など「アジア型」からイタリア、スペイン、フランスなどで拡大した「欧州型」に変化したことでもわかる。



札幌駅前と、繁華街のススキノ、大通りを結ぶ地下歩行空間。雪に覆われる冬は、とても便利で、おおぜいの人利用する。

医療従事者の踏ん張り、献身的な仕事に感謝しているだけに、あからさまには批判はしにくい。でも、この体制不備は、いかんともしがたかった。感染症病床を備える札幌市内の基幹病院の院長はこう認める。

「2009年の新型インフルエンザでは、侵入から蔓延まで2～3か月あり、初期対応を担う入管や保健所（保健当局）の対応は短期間で終わり、手慣れた医療機関に滑らかに移行した。しかし、今回は、空港検疫と移動制限、クラスター調査、コロナ診断（PCR検査）を担う保健所と、治療を担う医療機関とが別々の指揮命令系統で動く中途半端な状態がずっと続いた。患者が減ることもなかった。相互の連絡は乏しく、少なくとも患者のトリアージ（重症度認定）と、患者の搬送先を決めるメディカルコントロールが効かなかった」

北海道では、難病などに関連する保健所と医療機関との連携は良好であったが、感染症の連携は全くなかったという。感染症への備えは、ほとんど考慮していない想定外だったというわけだ。そのため、大都市を抱える札幌市、市保健所の対応は後手に回った。こうした不備、ちぐはぐな体制の陥穽を、めざといCovid-19（新型コロナウイルス感染症）は突いてきた。

## 後手に回った札幌市

4月から5月。札幌はまだ寒い。東京の冬のような気温になる日も少なくない。ここに住んでいてわかるのは、気温の日較差が大きく、体調を維持するのは難しい。発熱やのどの痛みなどの症状があっても、当局はそれをうまくさばけず、患者は病院をはしごする人も多かった。結果として、この4月、5月に、大きなクラスター（感染集団）が次々に発生した。

その一つが、多くのがん患者を治療する基幹病院の一つ、北海道がんセンターだ。がん患者は、新型コロナウイルス感染で重篤になりやすいので、同病院でも細心の注意を払っていたはずだ。しかし、4月16日以降、看護師を中心に医療従事者、患者に感染が広がり、6月13日の終息宣言までに82人が院内で感染した。このうち4割が看護師で、院内の緊急連絡に使っていたPHS（ピッチ）の使いまわしが、感染拡大の原因の一つとみられている。検証が必要だが、現時点でそれはない。

札幌市北区にある介護老人保健施設「茨戸（ばらと）アカシアハイツ」も集団感染が発生した。4月下旬からこれまでに、入所者ら92人が感染した。市保健所は、当初、施設に対し、安全区域と危険区域を分ける「ゾーニング」を指導し、感染がわかった入所者を病院に搬送せず、施設内にとどめる対応をしたため、8

人が犠牲（その後、入院措置をしたが、病院で亡くなった人を含めると 11 人）になった。保健所と病院との連携がうまくいかなかった典型的な例といえる。札幌市は、5 月 16 日にようやく施設内に対策本部を設置して対応し、病院との連携を図り、落ち着いてきたが、道内最大のクラスターとなってしまった。

こうした、保健所と病院の連携のまずさを解消しようと動いたのが、道立札幌医科大学の感染対策、感染管理のチーム。札幌市や保健所に手弁当で「おしかけ」、双方の連携を強化した司令塔機能がようやく生まれた。政府の法に基づく「緊急事態宣言」による外出自粛で、感染者が減り始めた 5 月連休明けのことだった。医療体制が整うまでに、2 か月以上要したことになる。

クラスターの大量発生背景には、司令塔の不在のほかに、感染者の受け入れ病院が増えなかったこともある。北海道内には、第一種、第二種を合わせた感染症病床は全道で 24 病院 94 床（うち 1 種は 2 床）しかない。大都市・札幌で専用病床は絶対的に不足し、指定医療機関の専用病床増設や、他の医療機関の一般病床を専用病床として活用せざるを得なかった。現在は道全体 600 床を確保したが、時間がかかり、感染者の急増に対応できない「医療崩壊」寸前だったともいえる。

感染者の受け入れ病院が少ない中、押し寄せる感染者の急増で、医療従事者の限界から感染が広がってしまったとみられるのが札幌市東区の「勤医協中央病院」だ。5 月下旬から 6 月にかけて看護師、患者ら 17 人が感染した。背景には、過重労働が絡み合う。



藻岩山から 1972 年の札幌冬季五輪の主会場となった真駒内アイスアリーナ（中央のドーム状の白い建物）を望む。

## 「昼カラオケ」で新たなクラスター

緊急事態宣言が解除され、医療や介護現場での集団感染が収束を迎えつつある中、「想定外のクラスター」（札幌市保健所）が新たに確認された。昼間にランチなどを食べながら、カラオケができる喫茶店での集団感染。いわゆる「昼カラオケ」（昼カラ）。

5月25日の政府の緊急事態宣言全面解除後、「昼カラ」で集団感染した人は、17日までに札幌市内の3店で、従業員を含め35人に及んだ。他の昼カラ店の利用客などの感染者を含めると、合計で52人になるとのデータも発表されている。特徴は、60、70、80歳代のお年寄りがほとんどということだ。冬の長い札幌で、「昼カラ」は、元気なお年寄りが交流を楽しむ憩い、癒し、慰労の場である。健康維持にも効果的だが、マイクの共有、屋外に音が漏れないようにするため換気がしにくい、大勢の仲間が集まる「密」、「飛沫が漂う」という感染しやすい条件が整っていたのである。

昼カラは悪いとは言えないだろう。健康的で、文化的なものであり、他地域より長い「外出自粛」を強いられた北海道民にとっては、一番気持ちのよい季節を迎え、「好きなカラオケぐらいやらせてよ」という心情はよく理解できる。「昼カラは悪くない。大事なのは、感染防止策」と保健所は盛んに強調するのも、この地に昼カラが広く浸透していることの表れでもあろう。東京では、夜の街関係の若い20、30歳代の感染者が多いのに対し、札幌は、昼カラなど活発に活動をする高齢者の感染が大半という、対極的ともいえる状況が続いている。なんとも興味深い。

## 日本脳炎ワクチン未接種も要因か？

もう一つ、北海道に多い理由として注目される「ファクターX」がある。「道民は、日本脳炎のワクチンを接種していない」という指摘である。黒木登志夫先生の分析でも紹介されているBCGワクチンを定期接種している国のCovid-19による死者数は少ないというものに似ている。

日本脳炎ワクチン接種効果を指摘する、北海道出身の江戸川病院の麻酔科医師の大林俊彦先生の分析を簡単に説明しよう。

大林先生は、2003年、東京大学医学部付属病院の集中医療部に所属していたときに、出現したSARSの患者受け入れ準備にかかわった。SARSの死亡率は本土中国が6・5%だったのに対し、香港の死亡率は16%、カナダの死亡率は17%と高かった。北京の児童疾病研究所が、保存していた子ども249人の血清のSARS抗体検査を実施すると、1歳以下の陽性率は54%、1～5歳は38%、

6～14 歳、14 歳以上はそれぞれ 33%もあり、SARS 流行の 1 年前、2 年前の検体からも陽性反応がでた。中国の一部研究者は、これが何らかのワクチン接種が原因ではないかと推定した。大林先生は、香港、カナダでは定期接種がなく、ベトナム、中国で定期接種しているのは、日本脳炎ワクチンではないかと推測する。

日本脳炎の病原体であるフラビウイルスは、コロナウイルスと同じ「+鎖の RNA ウイルス」。日本脳炎のワクチン接種によってコロナウイルスにも効く（交差性のある）抗体が出来上がったというのである。

翻って今回の新型コロナウイルスでは、道産子は日本脳炎ワクチン未接種の人が多いため、感染しやすいのではないかと、仮説が引き出されることになる。北海道では、もともと日本脳炎が流行することもなく、ワクチン接種はなかった。しかし、2016 年から定期接種が始まったという。幼稚園や保育園に通う 3～6 歳児は、内地と同じように発症はしないが、それ以上は、感染し、症状がでてしまうのではないかと。実際、2 月中旬、北海道中部の中富良野町で、8 歳と 12 歳の兄弟が発症した。日本で最初の Covid-19 の小学生症例となったが、これは日本脳炎ワクチンを接種してなかったためではないかというものだ。

### 多すぎる未公表、少なすぎる情報

この仮説が正しいかどうかはわからない。科学的な検証が不可欠だ。北海道で感染した 1167 人のうち、道産子か、そうでないかの感染率はどうか、疫学的なデータ分析も必要だろう。

そうした中で、気がかりなことがある。感染者の情報で年齢、性別、地域も含めてすべて「非公表」というケースが他の地域より目立つことだ。東京都は、5 月下旬から、「遺族の同意」がなくても、居住地、性別、年代などの属性は公表しているが、北海道では札幌以外の感染者の約 4 割が居住地を公表せず、行政地域の「振興局」単位での発表だ。新聞のおくやみ欄などと照らし合わせると、人口の少ない地域では本人特定ができてしまうということが背景にある。

しかし当事者特定に結びつかない、ある程度の情報を公開しない限り、行政が対策を構築することもできないし、一般大衆も行動に結びつけることもできない。善処が求められる。





色鮮やかな花と、緑の芝、木々が映える札幌市の大通公園。

## 新たな北海道の過ごし方模索

最初の出遅れが、その後も響いてしまった。北海道で感染者が減らない理由を一言でいえばそうなるのだろう。Covid-19 は、高温多湿の夏になれば感染者が減るといわれているが、油断はできない。

北海道は、6月19日から、①他都府県との不要不急の往来の自粛、②札幌市と道内他地域との不要不急の往来の自粛などの制限が解除された。今後、北海道と他地域との往来が活発になるかどうか、感染者の動向にどう影響するのか、不透明だ。

毎年、札幌市内で開催され、大勢の人が訪れる、「YOSAKOI ソーラン祭り」や「さっぽろ大通ビアガーデン」の開催は中止になった。寂しい夏だが、雄大で明媚な自然は“中止”にならない。少しでも、自然に触れ、いい季節を楽しみたいと思っている。それには、新型コロナ対策をしっかりとることが、欠かせないだろう。観光ガイドには載っていない、北海道の新しい過ごし方を模索したい。

最後に、羊蹄山を望む倶知安町の三島さんが公開しているシバザクラ庭園の写真を紹介してペンを置く。



長谷川聖治